明治三十九年四月一日印刷
明治三十九年四月五日發行

定價金參拾錢

著者　伊藤幸次郎
發行者　東京市日本橋區小舟町二丁目五番地　籾山仁三郎
印刷者　東京市京橋區築地二丁目二十番地　河本龜之助
印刷所　東京市京橋區築地二丁目廿一番地　株式會社國光社
發行所　東京市京橋區築地二丁目廿五番地　俳書堂

名著複刻全集 近代文学館 昭和43年9月

野菊の墓

左千夫作

後の月といふ時分が來ると、どうも思はずには居られない。幼ない譯とは思ふが何分にも忘れることが出來ない。最早十年餘も過去つた昔のことであるから、細かい事實は多くは覺えて居ないけれど、心持だけは今猶昨日の如く、其時の事を考へてると、全く當時の心持に立ち返つて、涙が留めどなく湧くのである。悲しくもあり樂しくもありといふやうな狀態で、忘れやうと思ふ事もないではないが、

寧ろ繰返し繰返し、考へては、夢幻的の興味を貪つて居る事が多い、そんな譯から一寸物に書いて置かうかといふ氣になつたのである。

僕の家といふは、松戸から二里許下つて、矢切の渡を東へ渡り、小高い岡の上で矢張矢切村と云つてる所。矢切の齋藤と云へば、此界隈での舊家で、里見の崩れが二三人玆へ落て百姓になつた内の一人が齋藤と云つたのだと祖父から聞いて居る。屋敷の西側に一丈五六尺も廻るやうな椎の樹が四五本重なり合つて立つて居る。村一番の忌森で村ぢうから羨ましがられて居る。昔から何程暴風が吹いても、此椎森のために、僕の家許りは家根を剝がれた事は只の一度もないとの話だ。家なども隨分と古い、柱が殘らず椎の木だ。それが

又煤やら垢やらで何の木か見別けがつかぬ位、奥の間の最も煙に遠いとこでも、天井板が丸で油炭で塗つた樣に、板の木目も判らぬ程黑い。それでも建ちは割合に高くて、簡單な欄間もあり銅の釘隱なども打つてある。其釘隱が馬鹿に大きい雁であつた。勿論一寸見たのでは木か金かも知れないほど古びてゐる。

僕の母なども先祖の言ひ傳だからといつて、此戰國時代の遺物的古家を、大へんに自慢されてゐた。其頃母は、血の道で久しく煩つて居られ、黑塗的な奥の一間がいつも母の病褥となつて居た。其次の十疊の間の南隅に、二疊の小坐敷がある。僕が居ない時は機織場で、僕が居る内は僕の讀書室にしてゐた。生摺窓の障子を明けて頭を出

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

すと。椎の枝が青空を遮つて北を掩ふてゐる。

母が永らくぶら〳〵して居たから、市川の親類で僕には縁の從妹になつて居る、民子といふ女の兒が仕事の手傳やら母の看護やらに來て居つた。僕が今忘れることが出來ないといふのは、其民子と僕との關係である。其關係と云つても、僕は民子と下劣な關係をしたのではない。

僕は小學校を卒業した許で十五歳、月を數へると十三歳何ケ月といふ頃、民子は十七だけれどそれも生が晩いから、十五と少しにしかならない。痩ぎすであつたけれども顔は丸い方で、透き徹るほど白い皮膚に紅味をおんだ、誠に光澤の好い兒であつた。いつでも活

活として元氣がよく、其癖氣は弱くて憎氣の少しもない兒であつた。

勿論僕とは大の仲好しで、坐敷を掃くと云つては僕の所をのぞく、障子をはたくと云つては僕の坐敷へ這入つてくる、私も本が讀たいの手習がしたいのと云ふ、たまにはハタキの柄で僕の背中を突いたり、僕の耳を摘まむだりして逃げてゆく。僕も民子の姿を見れば來い來いと云ふで二人で遊ぶのが何より面白かつた。

母からいつでも叱られる、

「又民やは政の所へ這入てるナ。コラァさつさと掃除をやつてしまへ。

これからは政の讀書の邪魔などしてはいけません。民やは年上

の癖に……

などゝ頻りに小言を云ふけれど、其實母も民子をば非常に可愛がつて居るのだから、一向に小言がきかない。私にも少し手習をさして……などゝ時々民子はだゞをいふ。さういふ時の母の小言も極つてゐる。

「お前は手習よか裁縫です。着物が滿足に縫へなくては女一人前として嫁にゆかれません。

此頃僕に一點の邪念が無かつたは勿論であれど、民子の方にも、いやな考などは少しも無かつたに相違ない。併し母が能く小言を云ふにも拘らず、民子は猶朝の御飯だ晝の御飯だといふては僕を呼び

にくる。呼びにくる度に、急いで這入つて來て、本を見せろの筆を借せのと云つては暫く遊でゐる。其間にも母の藥を持つてきた歸りや、母の用を達した歸りには、屹度僕の所へ這入つてくる、僕も民子がのぞかない日は何となく淋しく物足らず思はれた。今日は民さんは何をしてゐるかナと思ひ出すと、ふらふらッと書室を出る。民子を見にゆくといふほどの心ではないが、一寸民子の姿が目に觸れゝば氣が落付くのであつた、何のこつた矢張り民子を見に來たんぢやないかと、自分で自分を嘲けつた樣なことが屢あつたのである。

村の或家さ瞽女がとまつたから聽きにゆかないか、祭文がきたから聽きに行かうのと近所の女供が誘ふても、民子は何とか斷りを云

ふて決して家を出ない。隣村の祭りで花火や飾物があるからとの事で、例の向のお濱や隣のお仙等が大騒ぎして見にゆくといふに、内のものらまで民さんも一所に行つて見てきたらと云ふても、民子は母の病氣を言ひ前にして行かない。僕も餘りそんな所へ出るは嫌であつたから家に居る。民子は狐鼠々々と僕の所へ這入つてきて、小聲で、私は内に居るのが一番面白いわと云つてニッコリ笑ふ。僕も何となし民子をばそんな所へやりたくなかつた。

僕が三日置四日置きに母の藥を取りに松戸へゆく。どうかすると歸りが晩くなる。民子は三度も四度も裏坂の上まで出て渡しの方を見てゐたさうで、いつでも家中のものに冷かされる。民子は眞面目

になつて、お母さんが心配して、見てお出で見てお出でいふからだと云ひ譯をする、家の者は皆ひそ〳〵笑つてゐるとの話であつた。

さういふ次第だから、作をんなのお增などは、無上と民子を小面憎がつて、何かといふと、

「民子さんは政夫さんとこへ許り行きたがる、隙さへあれば政夫さんにこびりついてゐる。

など丶頻りに云ひはやしたらしく、隣のお仙や向ふのお濱等まで彼是噂をする。これを聞いてか嫂が母に注意したらしく、或日母は常になく六づかしい顏をして、二人を枕もとへ呼びつけ意味有り氣な小言を云ふた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「男も女も十五六になれば最早兒供ではない。お前二人が餘り仲が好過ぎるとて人が彼是云ふさうぢや。氣をつけなくてはいけない。民子が年かさの癖によくない。是からはもう決して政の所へなど行くことはならぬ。吾子を許すではないが政は未だ兒供だ。民やは十七ではないか。つまらぬ噂さをされるとお前の體に疵がつく。政夫だつて氣をつけろ……。來月から千葉の中學へ行くんぢやないか。

民子は年が多いし且は意味あつて僕の所へゆくであらうと思はれたと氣がついたか、非常に愧ぢ入つた樣子に、顏眞赤にして俯向いてゐる。常は母に少し位小言云はれても隨分だゞをいふのだけれど、

此日は只兩手をついて俯向いたきり一言もいはない。何の疚しい所のない僕は頗る不平で。

「お母さんそりや餘り御無理です。人が何と云つたつて、私等は何の譯もないのに、何か大變惡いことでもした樣なお小言ぢやありませんか。お母さんだつていつもさう云つてぢやありませんか。民子とお前とは兄弟も同じだ、お母さんの眼からはお前も民子も少しも隔てはない、仲よくしろよといつでも云つたぢやありませんか。

母の心配も道理のあることだが、僕等もそんないやらしいことを云はれやうとは少しも思つて居なかつたから、僕の不平もいくらか

の理はある。母は俄かにやさしくなつて、

「お前達に何の譯もないことはお母さんも知つてるが子、人の口がうるさいから、只これから少し氣をつけてと云ふのです。

色青ざめた母の顏にもいつしか僕等を眞から可愛がる笑みが湛へて居る。やがて、

「民やはあの又藥を持つてきて、それから縫掛けの袷を今日中に仕上げてしまひなさい……。政は立つた次手に花を剪つて佛壇へ捧げて下さい。菊はまだ咲かないか、そんなら紫苑でも切つてくれよ。

本人達は何の氣なしであるのに、人が彼是云ふので却て無邪氣で

ゐられない樣にして終ふ。僕は母の小言も一日しか覺えてゐない。二三日たつて民さんはなぜ近頃は來ないのか知らんと思つた位であつたけれど、民子の方では、それからといふものは樣子がからつと變つて終ふた。

民子は其後僕の所へは一切顏出ししない許りでなく、座敷の內で行逢つても、人のゐる前などでは容易に物も云はない。何となく極りわるさうに、まぶしい樣な風で急いで通り過ぎて終ふ。據處なく物を云ふにも、今までの無遠慮に隔てのない風はなく、いやに丁寧に改まつて口をきくのである。時には僕が餘り俄に改まつたのを可笑がつて笑へば、民子も遂には袖で笑ひを隱して逃げて終ふといふ

風で、兎に角一重の垣が二人の間に結ばれた樣な氣合になつた。

それでも或日の四時過ぎに、母の云ひつけで僕が背戸の茄子畑に茄子をもいで居ると、いつのまにか民子が笊を手に持つて、僕の後にきてゐた。

「政夫さん……。

出し抜けに呼で笑つてゐる。

「私もお母さんから云ひつかつて來たのよ。今日の縫物は肩が凝つたらう、少し休みながら茄子をもいできてくれ、明日麹漬をつけるからつて、お母さんがさう云ふから、私飛できました。

民子は非常に嬉しさうに元氣一パイで、僕が、

「それでは僕が先にきてゐるのを民さんは知らないで來たの。

と云ふと民子は、

「知らなくてサ。

にこ〳〵しながら茄子を採り始める。

茄子畑といふは、椎森の下から一重の藪を通り抜けて、家より西北に當る裏の千茱畑。崖の上になつてるので、利根川は勿論中川までもかすかに見え、武藏一ゐんが見渡される。秩父から足柄箱根の山々、富士の高峯も見える。東京の上野の森だと云ふのもそれらしく見える。水のやうに澄みきつた秋の空、日は一間半許の邊に傾いて、僕等二人が立つて居る茄子畑を正面に照り返して居る。あたり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.